

教材としての絵本（その二）

教材選びの留意

『どうやって ねるのかな』（福音館書店）

やぶうち まさゆき 作

『いぬが いっぱい』（福音館書店）

グレース・スカール 作

やぶき みちこ 訳

二〇〇一年四月二二日

但馬サークル特別講座

講演 西郷竹彦

二〇〇一年七月

文芸研 編集

教材としての絵本（その二）

教材観の観念

『どうやって ねるのかな』（福音館書店）

やぶうち まさゆき 作

『いぬが いっぱい』（福音館書店）

グレース・スカール 作

やぶき みちこ 訳

二〇〇一年四月二一日

但馬サークル特別講座

講演 西郷竹彦

教材の条件

『どうやってねるのかな』という絵本と『いぬがいっぱい』という絵本があります。『どうやってねるのかな』は日本人の人が、『いぬがいっぱい』は外国人の人が作った絵本です。

今まで四つのサークルで「どっちがいいか」ということをやりましたよ。そうするとほとんどが、圧倒的に『どうやってねるのかな』のほうがいいと言っていますね。『いぬがいっぱい』の方は人気がないですよ。ある所は、全員『どうやってねるのかな』がいいと言いますし、ある所は、何人かは『いぬがいっぱい』がいいと言いますが、やっぱり圧倒的に『どうやってねるのかな』のほうがいいと言っています。

その理由を聞くと『どうやってねるのかな』の方がおもしろいと言う。要するに興味関心ですね。

結局、今までの教材観、どういう教材がいいのかという、教材が持つべき条件、その条件の中で一番、今までの読解指導で言われてきたのはやはり「子どもが理解できるかでないか」という問題と「子どもの興味関心にどれだけ訴えるか」という、要するに興味性と理解性でした。これがほとんど教材を見るときの観点になっているわけです。

残念ながら「ものの見方、考え方」というのは、教材を見るときにほとんど出てこないのですよ、今までずっと見て来ても。

この二つの教材をくらべてみると、興味関心から言うと『どうやってねるのかな』の方

がいいです。

それから、理解ということでは、『いぬがいつぱい』の方はすぐわかる。『どうやってねるのかな』はいろいろとわからない所が出て来る。

それから、ものの見方、考え方から言うと『いぬがいつぱい』の方が決定的にいいので、『どうやってねるのかな』の方はまずいです。

なぜかということをお話します。

『どうやってねるのかな』



『どうやってねるのかな』の方がどうして、ものの見方、考え方としてよくないかということですが、初めからめくっていきます。

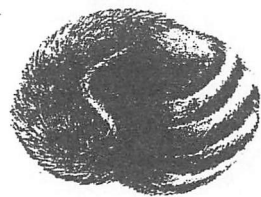
まず、とびらの所にリスが出てきて『どうやってねるのかな』という、次のページに『まるくなつてねます』とあります。

「へえっ、まるくなつてねるのかと。

『どうやってねるのかな』というところで、どうやってねるのかという興味関心に訴えます。で、見ると、「あ、なんだ、まるくなつてねるのか、ふうん」なんてことで「あ、おもしろい」ということになる。

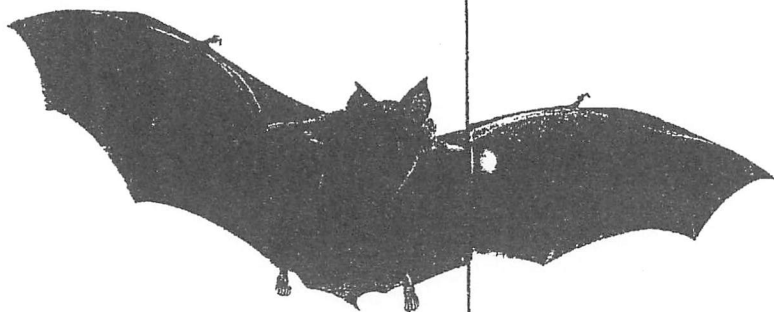


シマリスは
どうやってねるのかな



まるくなつて
ねます

さかさに
ぶらさがって
ねます



コウモリは
どうやって ねるのかな

次にコウモリが出てきて「コウモリは どうやって ねるのかな」というと、何かにぶらさがって、「へさかさに ぶらさがって ねます」と。「へえ、おもしろい」ということになるわけなんです。

生き物の本質

ところが、そこでだいじなことは、これは「生き物」です。生き物という題材を扱うときに、一番だいじな、本質的なものの見方、考え方は何かというと、「生きる」ということは、まず「食う」ということです。生き物はすべて何かを食うんですね。食わなきゃ生きて行けない。

それからもう一つは「身を守る」ということです。身を守るというのは、敵から身を守る。それから暑さや寒さなどいろいろなことから身を守る。

それから三つ目は「子孫を残す」ということです。

この三つのことが「生きる」うえで絶対に必要な、だいじな、本質的なことなのです。教材というのはものの見方、考え方を教えるということがだいじです。ものの見方、考え方というのは、ものの本質、ものの価値とかいうことをわからせるということでしょう。

生き物を取り上げるばあいには、生き物の本質。生きるとは、エサをとることと、身を守ること、子孫を残すこと。つまり、そのことが「観点」にならなくてはいけないわけでしょう。こういう教材を扱うときの観点というのをまずおさえる。

ねるじじい

そうすると、ねるといふことはどういうことでしょうか。生き物が寝るといふのはどういう状態でしょうか。もちろん休息のためですが。

(聞き手「他の生き物におそわれる心配のない状態の中で寝る」)

そう。寝るといふのは、生き物にとって一番あぶない状態です。無防備な状態です。だからこそ、天敵におそわれないということを考えなくちゃいかんわけです。

そうすると、この、リスがまるくなってねているという時にだいじなことは、なぜまるくなつてねるのかということですか。

まず、どこで、まるくなつてねているのでしょうか。画面では見えませんが、わからないですね。

(聞き手「木のほら。うろ」)

うん、木のうろね。

で、どうしてまるくなつていているのでしょうか。のびのびとねたらいいじゃない。どうして、横になつてのびのびとねないんです。

(聞き手「寒いから」)

そんなことはない。(笑) 寒くない時だって、まるくなつてねているんですよ。

どんな木のうろ？ 大きな木のうろ？

(聞き手「あ、小さい」)

なんで、小さなうろ？ なんで小さなうろにねるのかな。広々とした所に寝りゃいいのに。

(聞き手「他の動物が入つてこないように」)

そうそう。もちろん、そうよ。ねるといふのは無防備な状態だからね。敵からおそわれない、そのためには入り口の小さな、要するに小さなうろにまるくなつてねている。のびのびとなんかねられない。

でも、そのことがこの絵本でわかるのでしょうか。わかりませんね。ただ、「あ、こうやってねるのか。おもしろいな」というだけで、なぜそうやってねるのか、どこでねるのかはまったく説明不足なんです。

説明というのは、何もかも説明するというものではありませんよ。何もかも説明するということは、よけいなことを説明するということは、注意がそっちへいつてしまつて、いけないことです。

必要なことの、必要にして十分な説明。必要ということとは、生き物を扱う上でいつでもだいじなことは、生きるとはどういうことかということ。エサをとること。逆に言つて自分エサにならないこと、食われないこと、身を守ること。まずはこの二つです。エサを

とることと身を守ることが生きることだとすると、ねるということは、それと反対の状態にあるわけですね。だから、危険でない場所。あぶなくないように、ということをまず考えるわけです。そうすると、リスはなるほど小さなうろの中に身をちぢめてまるくなつてねるといことが一番なわけです。だからそうやってねるんだと。それが、この絵本からは、そういう疑問も出てこないし、疑問が出てきても、それを考えさせるヒントがまったくどこにもない。真つ白い空間にまるくなつていだけ。

ただ「まるくなつてねるのか」というだけだったら、それは単なる断片的な知識を与えただけのこと。こまぎれの知識を与えただけのこと。「あ、リスはまるくなつてねるんだ」というだけのこと。「それがどうした」というだけのことになるんですね。

じゃあ、コウモリはどこにねるんでしょう。ほらあなですね。じゃあ、ほらあなの床でねればいいじゃないの？どうして、こんな天井にぶら下がるの？さかさまになって。床のびのびとねたらいいじゃない。

（聞き手「キツネなんかがうろろするとあぶない」

そうよ。キツネだつてうろろするし、あぶないでしょう。だから天井にぶら下がるんですよ。これなら安全だよ。つまり安全のためですよ。ただ、安全ということを考えているんですよ。

じゃあ、ヘフラミンゴは どうやって ねるのかな」というと、立ってねますよね。つるもこうやって立ってねますよ。つるとかサギとか足の長い水鳥は。水鳥には二通りあって、足の長い水鳥と、足に水かきがついて、足の短い水鳥と。足の短い方は水の上を泳ぐ。そして時々水の中にもぐつて魚をとる、あるいは水草を食べる

つるとかサギとかフラミンゴというのは水の中に歩いて入って行って、上から魚をとる。だから足が長いですよ。

草つ原にすわつてねた方が楽じゃないの？
つるも立ってねますよ。どこに立ってねる？

（聞き手「水」

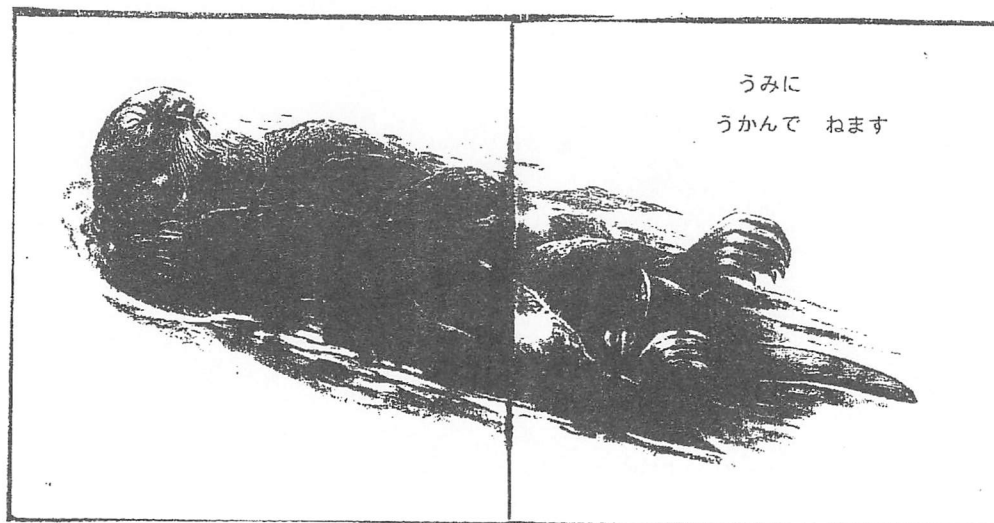
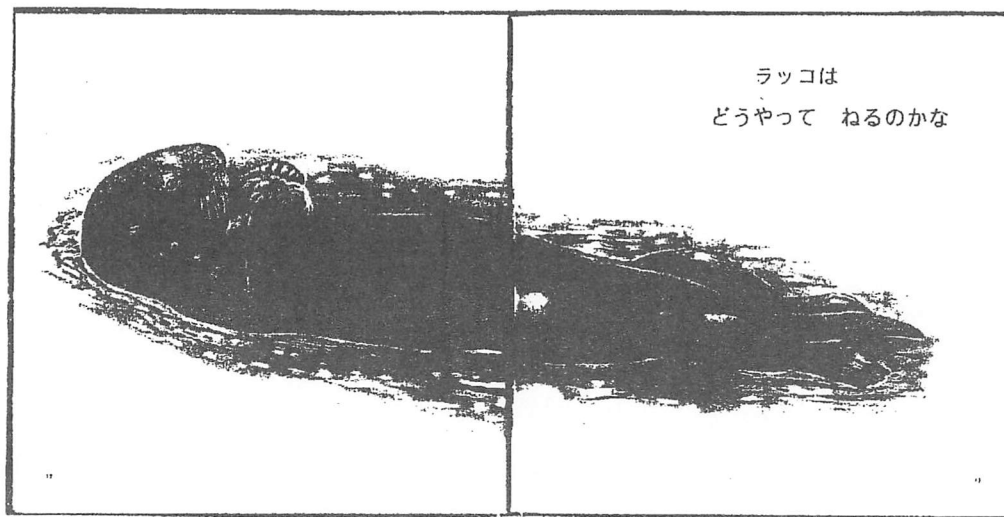
うん。水のある所。湿地ですね。だから、すわつてねられないですよ。すわつてねたら、キツネに食われる。水のある所に立ってねた



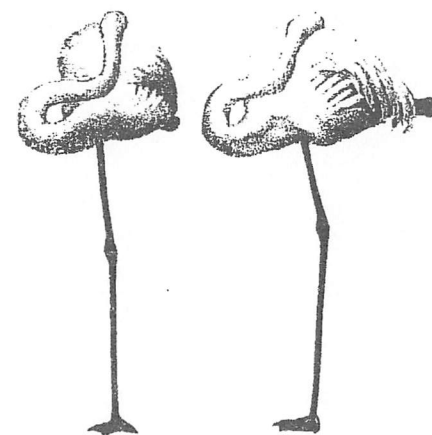
ら、キツネはやってこないでしょう。第一、立っているから、パッと見れば敵の来るのがすぐわかる。だから立ってねる。

一本足で、というのは、水の中に立ってねていると体温をうばわれるから片足で。なるべく体温をうばわれないために。

(聞き手)「時々、足を変えるわけですか」
そうそう。要するに立ってねるといことがだいじね。草原にすわったら、敵が見えないでしょう。これだったら、パッと目をあげれば周りが見えるしね。第一、水のある所に立っていれば、キツネやオオカミはやってきません。



1ぼんあしで
たって
ねます



ラッコはどうして陸に上がってねないの？
海の上でねるのはどうして？

(聞き手「さつきと一緒にじゃないですか。
天敵におそわれないように」)

うん、そうそう。ラッコというのは海の水
の上でねるんだけど、なんで、こんなふう
にこんぶをまきつけているの？

(聞き手「流されないように」)

うん。海の上でねると安全だけど、流され
るから。だから、根っこが生えているこんぶ
ですよ。浮いているこんぶをまきつけたって
(笑)「こんぶごと流されてしまうからね。ち
やんと考えてやっているんですよ。わかりま
したか。そうすると「かしこい！」というこ
とになるでしょう。

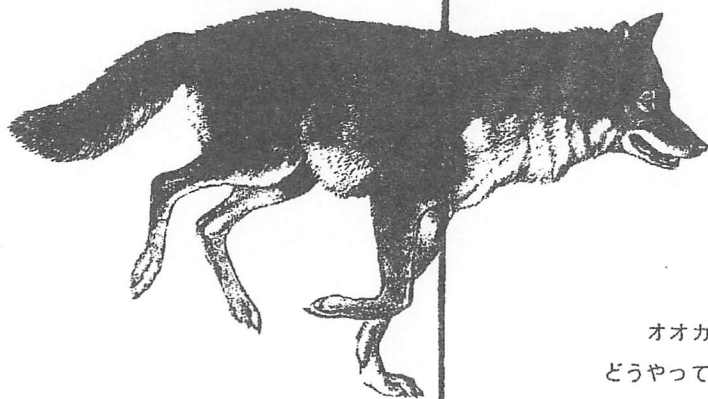
それじゃ、オオカミは どうやって ね
るのかな。オオカミは地べたに腹ばいにな
ってねますよ。なんでかな？

(聞き手「自分をおそうものはない」)

うん、自分をおそうものはない。でもね、
エサが近づいたら、パツと飛び出せるように。
オオカミというのは鼻が利くからね。そして
耳も利くし。まず鼻でえものが近づくのをか
ぎとる。ねている時でもちゃんとそれだけは
わかる。

人間もそうだけど、たとえば母親なんての
は、赤ちゃんが「コソツ」と何かしてもパツ
と目をさますでしょう。(笑)ふしぎにね。
他の時はグーグーねてて、けとぼしてもおき
ない(笑)のが、赤ちゃんがグズったりする
とパツと目をさます。

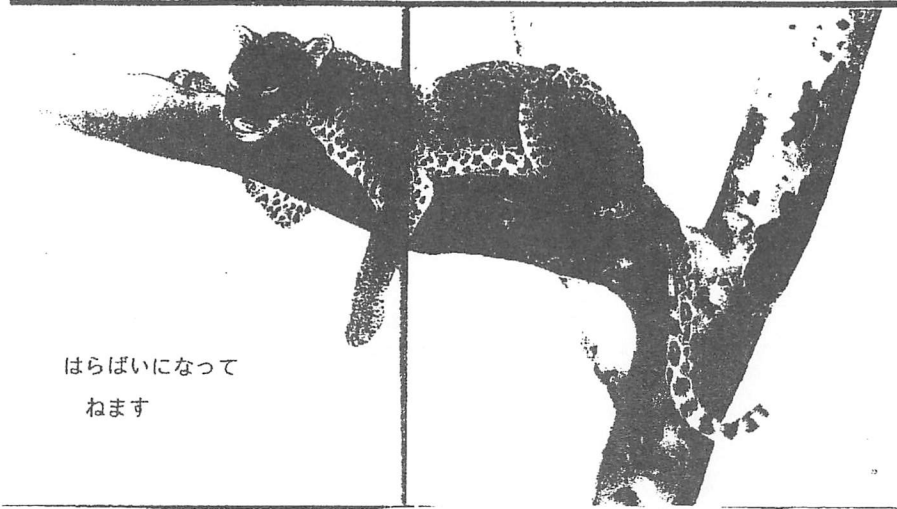
それは、脳の中に目覚めている点があるん
ですよ。「立哨点」(りっしょうてん)といい



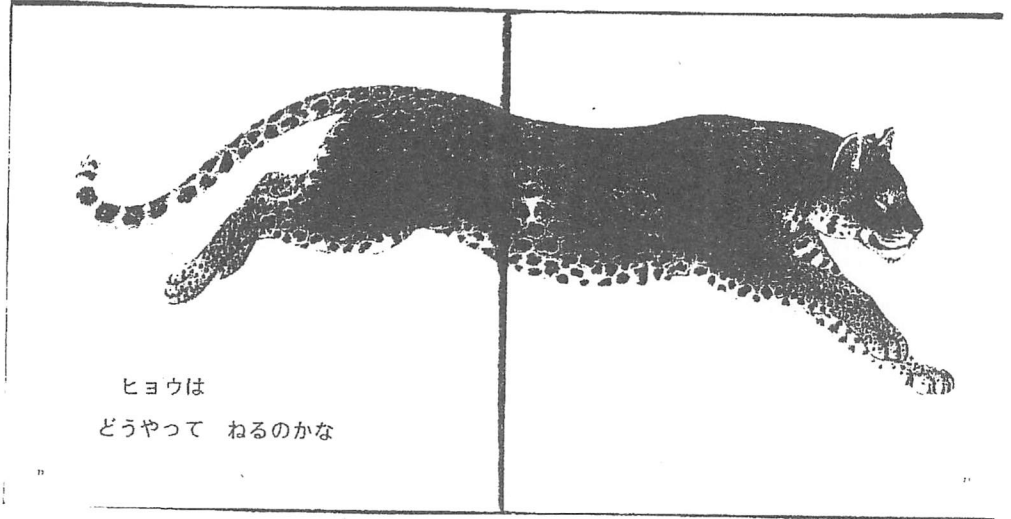
オオカミは
どうやって ねるのかな



はらばいになって
ねます



はらばいになって
ねます



ヒョウは
どうやって ねるのかな

ます。大脳の中のある所だけが目をさましているんです。そこは、ある特定の刺激に対してだけ反応する。ある独特の音。赤ちゃんのグズる声とかね。亭主が酔っぱらって帰ってきた声には反応しない（笑）。でも赤ちゃんのグズる声には反応するというふうに、その所だけが起きている。「立哨」というのは、見張りの兵隊が立っていること。見張りをすること。貧乏人は茶碗の音に目を覚ます。武士はくつわの音に目を覚ます。くつわというのは馬につけるもの。だから、敵がやって来たらパツと目を覚ます。昔からそう言います。貧乏人が茶碗の音で、というのは冗談ですが。要するに、その人間が一番関心を持っている物音ですね。

こういうオオカミみたいなのは、鼻がものすごく利く。えもののおいに敏感なんです。ぐっすりねているんですよ。ぐっすりねているけど、動物の、生き物のおいだけには敏感に、そこだけが「目」を覚ましていて、パツと立ち上がれる。そのためにこういう姿勢でねているんですよ。

ヒョウは、なんでわざわざこんな木の上でこうしてねるのでしょうか。

身を守らなければならない弱い動物と、他の動物を食って生きている動物は立場がちがいますね。ヒョウをおそうものはいないから、木の上に逃げているわけじゃないですよ。では、そのわけは何でしょう。広いサバンナの木の上にいるのは。

えものを見張っているんですよ。パツと目を覚ませばすぐ見えるように。だから、こんなかっこうをしている。ねこ族だから、こん

な木の上ののぼれるわけね。とったえものも、他のものにとられないように木の上ののせて、そこにひっかけておく。

次はラクダ。ラクダは楽だ（笑）っていう感じ。なぜか。はらばいになってねていますよ、砂漠で。ラクダを食うやつはいないからね。ラクダはただ楽にねてりゃいいんです（笑）だからこうやってベターツとねている。別にこわくないわけです。オオカミが来るわけじゃなし、ライオンが来るわけじゃなし。砂漠ですからね。だからこんなふうのほほんどねてるわけね。のほほんどねてるというのは、敵から身を守る必要がないから。それに、動くエサを見つけてとって食おうというわけでもないから。ラクダは草を食って生きているわけだから。だから腹ばいになってねる。気楽なもんですね。

キリンはどうして、こうやってわざわざ首をのぼしてねるの？子どもの方は首をまげて楽にしてねているでしょう。母親の方は首をのぼしてねているでしょう。もうちょっと楽にねたらいいんじゃない？

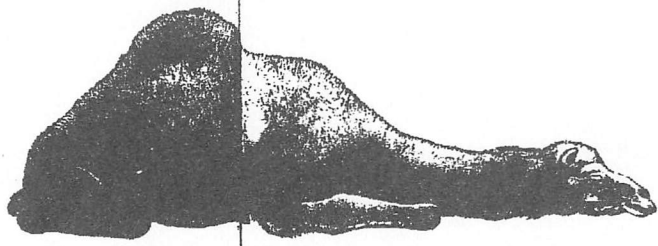
（聞き手「おそわれるから」）

キリンはおそわれるからね、ライオンなんかに。だから、いつでも首をのぼして警戒しているわけです。何か物音がしたらパツとそっちを見るとかね。だから、首だけはのぼしている。本当はペタンとねたいところでしょうけどね。子どもの方は楽にしてねてますね。子どもの方は自分で身を守る必要がない。母親が守ってくれるから。

というようなことがわからなくては、これをやった意味がない。

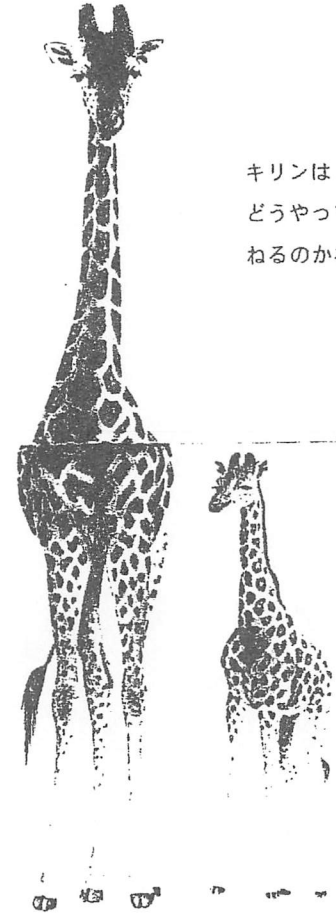


ラクダは
どうやって
ねるのかな



はらばいになって
ねます

キリンは
どうやって
ねるのかな



すわって
ねます



条件

子どもの興味をひきつけるということはだいじだけれども、興味だけひきつけておいて放り出してしまおうのはいけませんね。そこから、生き物を扱う以上は、生き物の本質を認識させる。そのための認識の方法は「条件」。条件ということを考える。肉食獣はえものをとって生きていく。草食獣はえものにならないように、他の肉食獣かえらおそれないようにということをまず考える。ねる時というのは、一番、無防備な状態だからこそ、一番にそのことを考えるわけです。いちいち頭で考えているのではなくて本能的にそうするわけだけでも、生き物にはそういうものが生まれつき備っているわけです。

ということをやるとなるならこれはりっぱな教材になるけれども、それが、たいへん不十分なのです。ただ興味本位にできているだけで、ことからの断片的な知識を与えるだけになってしまっている。「ヒョウは木の上にもるのか、そうか」というだけで。ラクダは腹ばいになってねるんだなあ。リスはまるくなつてねるんだなあ。これではやはり中途半端ですね。私がいつも主張するのは、一番だいじなことは、ものの見方、考え方です。これでものの見方、考え方が育つか育たないか。どうしたら育つか。これがやはり中心です。こ

れが抜きになった教材は、どんなにおもしろくても、老朽としてはダメです。

教材はおもしろくなくはないけれども、おもしろくなくはないけれども、おもしろいだけ、というのとはつまらんですね。

たとえば食べ物。そのばあいは、その食べ物にどういう栄養があるかがだいじ。おいしいけれどもおいしいものではない。おいしくなくてはいけませんが、だいじなことは栄養があるということです。おいしいだけで栄養がない。いや、もつと言え、おいしいだけで、へんな添加物が入っていて体にも悪いということもありうる。やはり、栄養があつておいしいということが必要です。

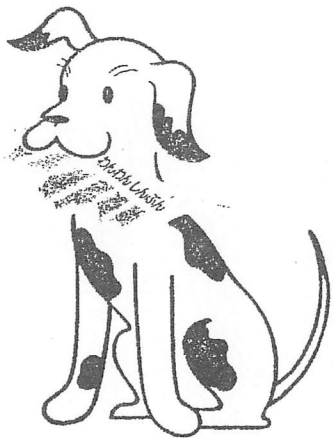
『いぬが いっぱい』



では、『いぬが いっぱい』を見てみましょう。ここにはどういうものの見方、考え方があるのか。どういうものの見方、考え方をここで学ばせることができるか。しばらく考えてみてください。



おりこうな いぬと



いたすら いぬ

性格

（いぬが いっぱい）というのは、いろんな犬がいるということですね。（おりこうないぬ）というのは、犬の何でしょう。

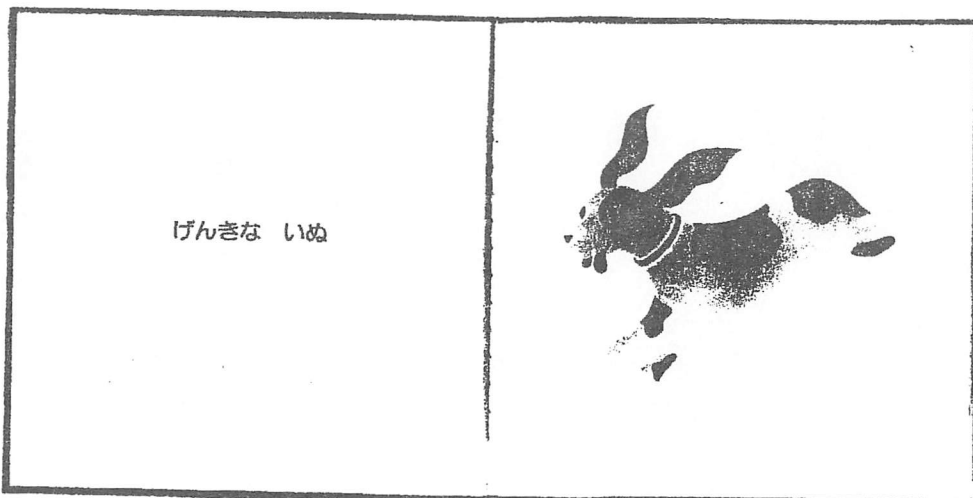
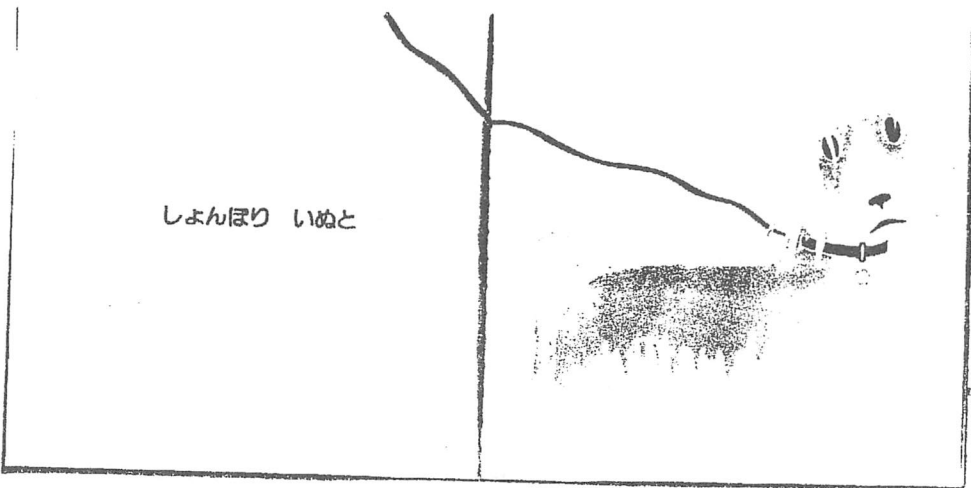
それから（いたずら いぬ）。これは犬の何ですか。

みなさんの学級の子どもを思い浮かべてもらいなさい。これは子ども何ですか。

（聞き手「性格」）

性格ですね。いろんな子ども性格、性質ですね。いろんな性質の子がいますよね。あばれんぼうもいれば内気な子もいれば、それぞれでしょう。

犬には（おりこうないぬ）もいるし、まあ、バカな犬というのはいないかもしれませんが、（いたずら いぬ）もいるし、というふうに。



状態(ようす)

それから(しよんぼり いぬ)とか(げんきな いぬ)とか(のんびり おひるね)とか(せつせと おしごと)しているとか。これは、犬の何？

(聞き手「状態」)

状態。犬のようすですね。(おひるね)というのは、ひるねをしているという性質じゃないですね。状態、ようすです。たとえばねているか、起きているか、土をほっているか、ほえているか。これは、ようすですね。

子どもでもいろいろなようすがあるでしょう。字を書いているとか、お手玉で遊んでいるとか、何か食べているとか。これは状態、ようすです。

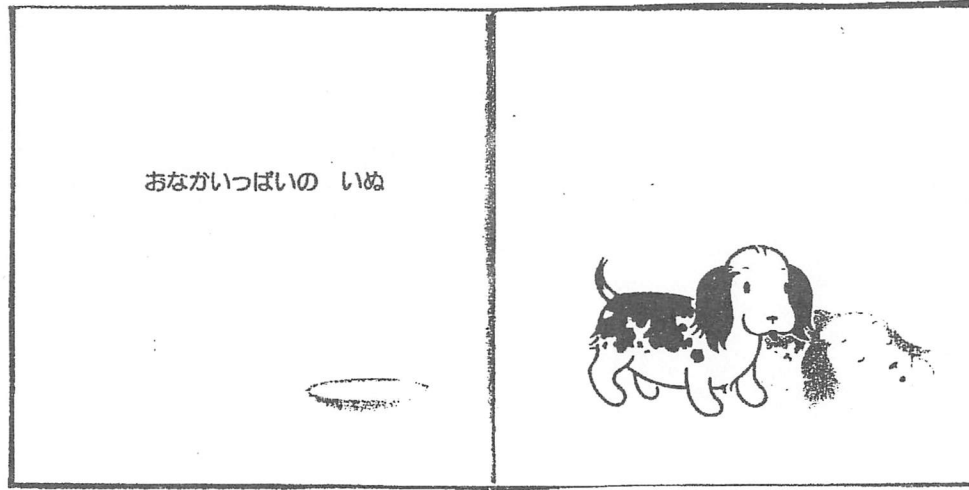
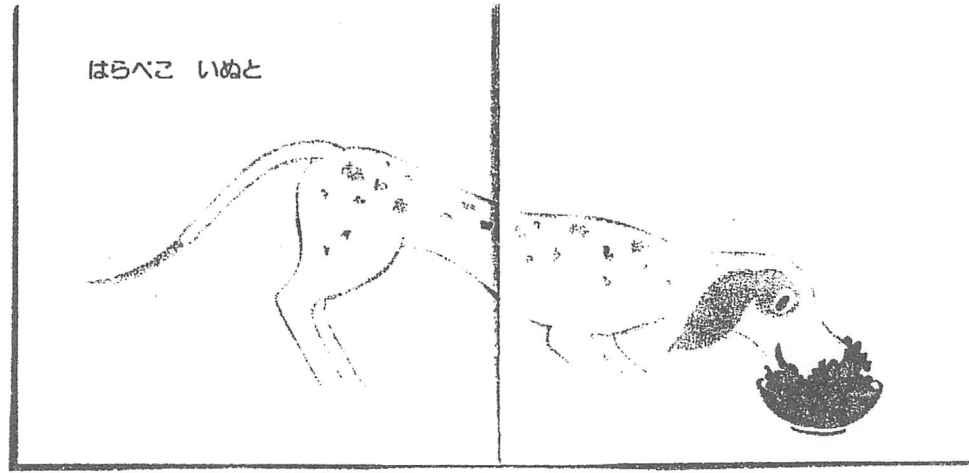
のんびり おひるね



せつせと おしごと

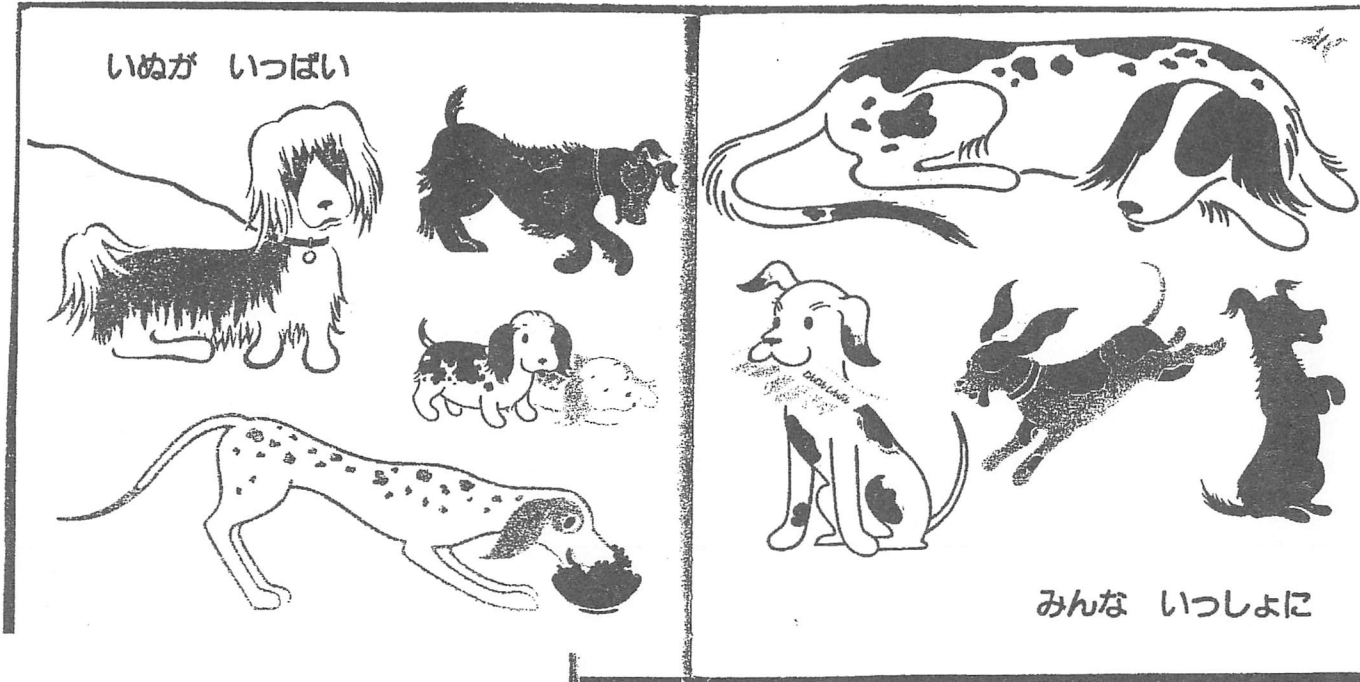


「犬」と言ったときに、どういう性質の犬がいなくて、ということがありますね。それから何をしているかというようすがありますね。それから、よろすの他に、今どういう状態にあるかということがありますね。おなかがすいている状態とか、おなかが満ち足りている、おなかがいっぱいとか。これは状態ですね。



種類

しかも、見てください。この犬とこの犬とぜんぶちがうでしょう。犬の種類です。ここ
までくる間にいろんな犬の種類が出てくる。私は犬の種類にくわしくないから何という種
類かわかりませんが、ぜんぶちがう種類の犬です。ことばでは書いてないけれども、いろ
んな種類の犬がいるよ、と。



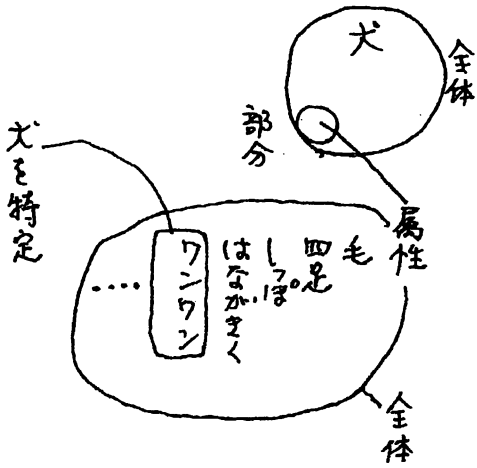
わんわん

そうすると、いろんな種類の犬がいると、いろんな性格の犬がいると、いろんなことをしている、いろんな状態にあるということが一通りぜんぶ出てきましたね。

たとえば今、子どものことを問題にするとすると、その子は、たとえば白人の子か黒人の子かという人種のちがいがありませんね。それから、今おなかがすいているとか腹いっぱいであるとか、悲しい状態とかうれしい状態とか。それから、今は何をやっているかというようす。それでもうすべてでしよう。

そういうことが、生き物である犬に関して一通り出てくるわけね。「犬」と言ったときに、そういういろんな犬がいるということがまずありますね。さまざまだということ。犬というのはね実にさまざまな犬がいると。その多様性。みんなちがう。一つ一つちがうということですね。

まず、ちがうということが問題になります。ちがうということが問題になるけど、しかしやはり犬は犬なんですね。



属性

犬は犬ということはどういうことかということ、(板書)これは犬の全体。こういうのを部分といいます。

で、「犬とは何か」というときに、これを「属性」といいます。

犬の属性というと、毛が生えている。毛ものだということですね。

それから四つ足。それから耳と鼻が利くということ。それから雑食の何でも食べる雑食

だということ。それからワンワンと鳴く。他にもいろいろありますが、こういうものを犬の属性といいます。「犬とはどういうものか」と言ったときに「犬とはこういうものです」ということを言うためには、こういうことを一つ一つあげていく。

これは犬全体の部分を言っているわけですね。属性というのは部分ということ。全体に対しての部分。これらの部分をぜんぶ寄せ集めたものがつまりは犬ということになるわけですけども、犬というものを説明するとき「犬というのは毛が生えている毛ものです」と言っているのでしょうか。もちろんいい。いいけど、それは犬だけじゃないでしょう。毛が生えているのは、ねこもねずみも、その他いっぱいいますね。

では四つ足というのは？これも、ねこもねずみもみんなですね。犬というものを特定することにはなりませんね。特定できないでしょう。

耳や鼻がよく利くということ。これも他の動物でもありますね。

雑食といえ、ねこだって雑食ですね。

でも、「ワンワンと鳴く」というのはどうもすべての犬がワンワンと鳴く。犬しかそうは鳴かないでしょう。ねこやねずみはワンワンと鳴かない。

そうすると、この「ワンワンと鳴く」という属性は犬を特定する。そのことは犬にしかあてはまらないことを特定といいます。

たとえば容疑者が三人いるとしますね。あやしい、犯人と思われる人物が三人いると、どれが犯人とはつきり言えないでしょう。どれが犯人かはつきり言えるというばあいに、犯人を特定したといえます。特定するというのは、それがピタリと決まるということです。

相

そうするとですね、犬というものの、これらの属性とその他にも穴をほるとか、よこになつてねころがるとかがありますね。こういうのを犬の「相」というわけです。犬の姿、ようす。犬のさまざまな姿やようすややっていることがありますね。毛の色やもようがちがうとか。一匹一匹の犬はぜんぶ相がちがう。

人相とか毛相とか言うでしょう。相がちがう。姿やようすが一匹一匹ちがう。

ところが、そういう属性の中で、ワンワンと鳴くということだけは、すべての犬に共通。すべての犬が同じようにワンワンと鳴く。たとえ姿かたち、つまり相がぜんぶちがっても、ここに書いてあるように、穴をほっているものもいるし、ひるねしているものもいるし、ガツガツ食っているものもいるし、チンチンしているものもいるし、というふうにいるんな姿をしているが、しかし「わんわん」となくという相はすべての犬に共通。

それで、この「わんわん」となくというのは犬の属性でもあり同時に、犬の相でもあるわけです。相というのはようすとか姿とかいうことですよ。

だから「みんな いっしょに」
「わんわん」となく。

犬というものはいろんな種類がいる、と。いろんな性格の犬がいること。いろんな状態、ようすをしている犬がいる、と。こういうことが書かれているわけです。しかも毛がはえているとか四つ足だということも見ればわかります。

にもかかわらず、すべての犬に共通することは「わんわんと鳴く」ということだと。

では、犬以外の動物とちがうのはどこかという、やはり「わんわんと鳴く」ということだと。二通りの意味があるわけです。

二通りというのはわかりますか。ワンワンと鳴くというのは犬全体に共通。姿かたちがちがっていてもワンワンと鳴くということは犬全体に共通することだと。これが一つ。それからもう一つ。ワンワンと鳴くということは他の動物にはないことだと。犬しかないこと。

ということと二通りの意味があるわけです。

ワンワンと鳴くという属性は犬にしかない属性だと。犬ならみんなワンワンと鳴くという事です。

同一性・差異性

哲学の方でも科学のほうでも、もの見方・考え方、ものを認識するというときに「同一性」と「差異性」ということがあります。「差異性」のぼあいには「性」を省いて「差異」ということがありますけども。

何かを認識する、たとえば「犬とは何か」「樺とは何か」とか「カラスとは何か」とかそのものの本質を認識するときに、カラスの場合すべてのカラスに共通なものは何かという時、「黒い」ということと「カアカア鳴く」ということですね。しかし一羽一羽のカラスはみんなちがうでしょう。この世の中に同じカラスは二羽とない。一羽しかない。人間でもそうでしょう。「○○太郎」というとその人しかない。

一つ一つ違うということは「差異」です。すべてのカラスが黒いというのは「同一性」です。

すべての犬はワンワンと鳴く。これは同一性です。しかしすべての犬は種類やようすが全部違うというのは差異です。

差異と同一性の両方をもっています。

類比・対比

文芸学では同一性と差異のことを「類比」と「対比」というのです。

類比というのは同じところ、同一、共通なところを見る。すべてのカラスに共通なところ。すべての犬に共通なこと。その共通性を類比する。

対比というのは、ちがいを、相違性、差異を見る。ちがいを見る。

犬ならば犬というものを見るときに、一匹一匹の犬がみな違う。そのちがいを見る。

しかしすべての犬は同じようにみなワンワンと鳴くということでは共通です。

四つ足ということも共通性ですよ、犬のぼあい。しかし四つ足と言ったぼあいには犬だけじゃなくて、ねこもねずみも四つ足だから、これは犬を特定することにはならない。その問題です。

平等相・差別相

ヨーロッパの数学、哲学の認識の問題で、すべてのものを同一性と差異性、この二つの見方でとらえるということがはっきりしてきたのは戦後なんです。

ところが仏教哲学ではすでに、もう二〇〇〇年も前に、これを平等相と差別（しゃべつ）相との二つの相でものを見るということを言っているのです。

犬とは何かというときに、差別相をとらえる。一匹一匹のちがいを見る。しかし同時に犬全体に共通するものが何かというふうに平等相をとらえる。二つの相でとらえることが、

犬というものをとらえることだと、こういうことです。

教師であるみなさんの立場ですと、子どもがクラスに四〇人いるとするでしょう。四〇人の子どもたち一人一人がみんなちがう。ちがいを見てやるということが差別相においてとらえることです。

しかし四〇人の子どもは、子どもとしてみんな共通のものをもっている。その共通のもの何かということが、平等相においてとらえるということです。類比する。同一性においてとらえる。

これが、ものごとを認識するときの基本なのです。ものごとを認識するときには平等相と差別相の両方でとらえる、と。あるいは同一性と差異性の両方でとらえる、と。あるいは文芸学でいえば類比と対比という二つの方法でとらえる。

類比というのはくらべると書きますね。これは方法論をふくんでいるからです。

認識するときに、ちがいをくらべて見る。あるいは共通性をくらべて見る。くらべて見るという見方、考え方をふくんだ言い方が類比、対比なんです。

同一性、差異性、平等相、差別相は方法をふくんでいない。私が類比、対比と言うのは方法をふくんでいいる。くらべるといいう方法をふくんでいいます。ちがいをくらべて見る。共通性を比べて見る。つまり「比べて見る」という見方、考え方が入っているわけです。

同一性、差異性には見方、考え方は入っていない。ものには同一な性質とちがう性質があるよ、ということを書いていいるだけです。

私の方は、それがあからこそ、ちがいをくらべる方法や共通性をくらべる方法ということを考えるわけです。だから対比、類比と言うわけです。教育では方法が問題になってきますからね。

認識論の基本

そうしますと、この『いぬが いっぱい』という絵本は、犬みたいなありふれた題材を使って、ものを見るときには、ちがいを見ると同時に共通性は何か、そして犬だけを特定できる共通性は何かということを見なさい、ということを教えているわけです。

現代の哲学、科学でいえば、同一性と差異性で、仏教哲学でいえば、平等相と差別相の二相でものを見るのがだいじだということです。

ものの本質を認識するというときに、どうやって認識するかという、認識論の基本があるわけですね。

では、この〈わんわん〉という文字はなぜ一つ一つ色がちがうのでしょうか。色が四通りありますよ。〈わんわん〉と黒だけでせんぶ書けばいいじゃないですか。

先に言ったことを思い出してください。

ワンワンと鳴くことは共通だけでも、その鳴き声に大きいやら小さいやらこわいやら

音色がみんなちがう。音色がちがう。まさに「色」がちがう。

同一性を見ると同時にまたその中に差異を見なさいということ。す。

認識とはそういうものです。ということ。つまりは言っているわけです。

宮沢賢治「鳥百態」

それでは、ここで、宮沢賢治の「鳥百態」という詩を見てみましょう。

鳥百態

宮沢賢治

雪のたんぼのあぜみちを
ぞろぞろあるく鳥なり

雪のたんぼに身を折りて
二声鳴けるからすなり

雪のたんぼに首を垂れ
雪をついばむ鳥なり

雪のたんぼに首をあげ
あたり見まはす鳥なり

雪のたんぼの雪の上
よちよちあるくからすなり

雪のたんぼを行きつくし
雪をついばむからすなり

たんぼの雪の高みにて
口をひらきしからすなり

たんぼの雪にくちばしを
じつとうづめしからすなり

雪のたんぼのかれ畦に
ぴよんと飛びたるからすなり

雪のたんぼをかざとりて
ゆるやかに飛ぶからすなり

雪のたんぼをつぎつぎに
西へ飛びたつ鳥なり

雪のたんぼに残されて
脚をひらきしからすなり

西にとび行くからすらは
あたかもごまのごとくなり

差別相

一連から二三連までありますが、最後の二三連をのぞいて、残り一二連はぜんぶ、これは何ですか。鳥の何が書いてありますか。一連、二連、三連、四連……と。

くらべて見てください。一二の連をくらぶるとどうですか。同じ、ちがう。

ちがいますね。ぜんぶちがう。だから「鳥百態」となっているわけですよ。ぜんぶちがうでしょう。

最初の連は〈あぜみちを／ぞろぞろあるく〉でしょう。

次は〈身を折りて／二声鳴ける〉でしょう。

三連は〈首を垂れ／雪をついばむ〉でしょう。

次は〈首をあげ／あたり見まわす〉。

こんどは〈たんぼの雪の上／よちよちあるく〉。

それから六連は〈雪をついばむ〉。

七連は〈口をひらきし〉。

次は〈くちばしを／じつとうづめく〉。

その次は〈びよんと飛んでいる〉。

それから〈ゆるやかに飛んでいる〉。

そして〈西へ飛びたつ〉。

そして〈脚をひらく〉いている。

と、こういうふうにみんなようすがちがいますね。こういうのを差別相といいます。鳥というものを見るときに、一羽一羽の鳥がみんなちがうということを見ているわけです。

ぜんぶ、一羽一羽がちがうよ、と。すがたかたち、やっていることがちがうよ、というふうに見ているわけですね。差別相です。

ところが、しかし、鳥というのは、どの鳥もみんなカアカア鳴くと、どの鳥もまっ黒だと、こういうふうに言えば、これは平等相でとらえたことになるわけですね。

ところで宮沢賢治はどういうふうに言っているかという、最後の連を見てください。

〈西にとび行くからすらは

あたかもごまのごとくなり〉

ここはちよつと賢治のわれわれとちがうところですね。賢治は鳥というものをとらえるのに、鳥というのは一羽一羽がちがうのだということのまま差別相においてとらえる。しかし同時にすべての鳥はみんな同じなんだということを書いていいたいわけですね。

同じなんだというときに、われわれはどこに目をつけるかというと、カアカアと鳴くとか、真つ黒い鳥とかいうところに目をつけますね。これはまちがいじゃないですよ。これも鳥のとらえ方、ふつうに言う鳥のとらえ方ですね。

ところが宮沢賢治はさすがに法華經の信奉者です。

仏教哲学の立場に立って、この

一羽一羽の鳥の姿を「ぼんのう」の姿と見るんですよ。

ぼんのうということばは仏教のことばですね。ぼんのうというのは、飯を食いたいというのもぼんのうですね。寝たいというのもぼんのうです。人としゃべりたいというのも。要するにわれわれにはさまざま欲望がある。ありとあらゆる欲望、それこそ、百いくつだったかな？ぼんのうの数。

(聞き手「百八つ」)

百八ね。おおみそかに鳴らす鐘の数。百八つもぼんのうがあるという。私が数えてもせいぜい十ぐらいしか言えないけど、もつと細かく数えるんですね。きれいになりたいとか、達者でいたいとか。これもぼんのうでしょう。早く言えば欲望です。それをぼんのうと言います。ぼんのうというのは数かぎりなくいっぱいありますね。

これは一つ一つぜんぶぼんのうの姿なんですよ。そろそろ歩くのも、鳴くのも、ついはむのも、あたりを見回すのも、ぜんぶ、それぞれの鳥のぼんのうの姿ですね。ぼんのうということばで言うと一羽一羽ぜんぶちがう、姿かたちやようすが、ということばを言っている。

平等相

しかしですね、すべての鳥が夕方になると西のねぐらへ飛んでいきますね。ねぐらに帰るということ。そのねぐらに帰るということを〈西にとび行く〉と言っています。西というのは西方浄土。つまり救いの世界。ぼんのうの世界から涅槃へ。ぼんのうの世界から浄土の世界へ。「救いの世界」へということばではどの鳥もみんな一緒だということばです。

すべての衆生がみな救われるのだということばを言っているわけです。そういう意味においては平等なのです。

「悪人なをもて往生す」と言うじゃないですか、親鸞のことばですけど。すべて救われるという意味で最後の連があるわけです。

〈西にとび行くからすらは

あたかもごまのごとくなり〉

〈ごま〉というのは仏教のことばでもあります。ここでは植物のごまですよ。ごまつぶみたいな黒い。でも、その「ごま」ごまつぶみたいに「ごま」ということにひっかけて、要するに仏教の「ごま」という救いの姿を描いている。だからこれは平等相です。すべての鳥は平等にすくわれると。

ぼんのうの姿は一羽一羽ちがって〈鳥百態〉、さまざまだと言っているわけです。

『子どもと心を見つめる詩』の中のこの詩の下に私が解説を書いていますから、読んでみます。

〈鳥といえは、ただ真つ黒く、カーカーとなくだけの鳥と、これは平等相ですね、

ある意味で言えば同一性ですよ。

〈でも、賢治は、鳥でも、それぞれ十人十色〉それぞれの個性で生きている、さまざまな、それぞれのぼんのうを持って生きている、〈百羽いれば百通りの姿〉、ぼんのうの〈百態があるというのです。／でもどれがほんとうの鳥というわけではありません。どれも、それぞれ烏らしい。どの鳥も烏らしく生きているのです。／人間もひとりひとりちがいますそれぞれの個性をもって生きています。でも、人間はやはり、ひとつ、おなじ（平等）といえます〉というわけです。

〈この詩の終連で鳥はみんなごまつぶをばらまいたようだとあります。一羽一羽はちがっても、やはりみんなごまつぶのおなじだといっているのです〉。これはもう少し説明がほしいですけども。つまり、西へ飛び行くということは、すべての鳥がねぐらに帰って行く。ちやうどそのように、すべての鳥が救われて涅槃の世界に入ると、浄土の世界に入ると、こういうふう言っているわけですね。

それを〈賢治は法華經の信奉者でした。仏教では、〈百羽百態〉であるということと差別相といい、それが、すべて、ごまつぶをばらまいたようにみな同じであることを平等相とこの詩でも表現しているといえます〉。仏教的に言えば、すべての衆生は救われるということと賢治は言っているわけです。

ものの見方、考え方として、差別相と平等相ということをはっきり出しているわけですね。

そういう点で仏教哲学というのは、現代の哲学に先んじていると言えます。現代哲学が同一性、差異性ということと言っていると同じことを早くに平等相、差別相ということばで、二相ということばで言ってきているということなんです。

よく、仏教というとき古くさいとか抹茶くさいとか言われますけど、古くてもっとも新しい思想だと私は思います。

ソシユール「言語は差異の体系」

たとえばみなさんが哲学の本を見るとよく「差異」ということばがでてくると思います。差異というのは現代哲学のキーワードなんですよ。

ソシユールという人を知っていますかね。現代哲学の大先輩です。言語学という学問を最初に、学問らしいものにした人です。その人の『一般言語学講義』という本がありますが、そのソシユールの理論の中に「言語は差異の体系である」とあります。

つまり、ことばというものは、ほかのことばとの差異においてのみ、ものごとを指し示したり、それについて述べたりすることができる、そんな道具だと言っている。どうということかというとき、みなさんは、「犬」ということばは、最初から「犬というもの」を指示

している、指し示していることばだと思おうでしょう。今までですと、ふつうには、そう考えて来たのですよ。「犬」というものを直接指していることばだと。

ところが、ソシユールは、「犬」ということばは、「ねこ」だとか「ねずみ」だとか・・・といったことばとの差異によって定義されるのだと言った。そして「犬」ということばは、それがほかのどんなことばとも異なっているがために、「ニャーニャー鳴く動物ではない」「チューチュー鳴く動物でもない」・・・ということを表現することができ、結果として「犬」というものを指し示すことが可能なのだ、ということです。これは一見まわりくどい考え方もしませんが、実際はそうでもありません。たとえば、「犬とは何か」ということを人間はどのようにして認識するか考えてみましょう。まず犬は生き物です。「生き物」というものは、無生物との差異によってのみとらえられますね。また犬は動物ですが動物という概念は植物やカビやらの対比によってのみはつきりする。このように、「犬」というものはほかのすべてのものとの差異によってのみとらえられるのです。だからこそ、「犬」ということばは「ねこ」「ねずみ」・・・といったあらゆることばとの差異でもって、「ねこ」「ねずみ」・・・などと異なるものとしての「犬」を浮き彫りにする、と。こういうわけですね。

ついでだから言いますが、みなさんは、「犬」ということばは、犬というものを指し示している、指し示していることばだと思おうでしょう。今までですと、普通には、そう考えてきたのですよ。犬というものを指し示していることばだと。

ところが、ソシユールは、犬ということばは、ねずみとかとの違いを言っていることばだと。わかりますか。ことばというのは差異ということばで成り立っているのだというわけです。これをやりだすとちよつとやっかいです(笑)。

たとえば「私」ということばは「あなた」ということばとの関係においてであると。それから「親」ということばは「子」ということばとの関係においてであると。「裏」は「表」との関係においてであると。表ということばは裏ということばとのちがいが、裏ということばとの関係においてあるということばです。

それから何でもいいんだけど、「牛」というのは「馬」なら「馬」とのちがいが、ということとしてあると。あるいは「山羊」とのちがいがいいとあると。

要するにことばというのは他のことばとのちがいが問題になるんだと。ちがいを指し示しているんだと。こういう考え方なんです。

ふつう私たちは。牛なら牛というものを指しているんだと考えてきたでしょう。これが大昔からの、学問の世界で言えばアリストテレスの昔からずうっと今日まで続いてきた言語についての考え方です。

名は体を表すと、牛という名、牛ということばは、牛という体、牛という実物を指し示

しているんだと、こういうふうに考えて来た。

ところが、そういう考えを否定して、学問として否定して、牛ということばは、牛ではないものとの関係においてある、と。わかりますかね。

牛ということばは牛以外のことば、馬とかねずみとかねことかいうことばとの関係において、そのちがいに成り立っていると。それとのちがいを示していると。こういうことです。

何かあたりまえのような、何かバカげているような感じがしませんか、聞いていて。

それで、牛というのは、日本語の中のいろんなことばがあって、網の目のようないろんなことばの中の一つの結び目としてあると。

日本語といういろんなことばがありますね。これらがぜんぶ網の目のように関わり合っているということですね。

たとえばここに牛ということばがある。この牛ということばは、牛を指しているのではなくて、馬とはちがう、ねずみともちがう、ねこともちがう、人間ともちがう、机ともちがう。そのちがいに成り立っていると。そういうわけです。

牛ということばは、馬じゃないし、ねずみでもないし、ねこでもないし、人間でもないし、机でもないという、他のものとの差異、ちがいに成り立つ。牛ということばがわかるためには、馬とはちがう、ねずみともちがう、ねこともちがう、人間ともちがう、机ともちがうということがわかるということなんです。

そういうものを表すのがことばだということからスタートする、考える。これが現代の言語学の共通な考え方です。いろんな言語学者がいますが、少なくともこの考え方は共通にもっています。この共通な考え方を最初に言ったのがソシュールという人です。

それまでは、世界中の人がみんな、牛ということばは牛を指していると言ってきた。一見わかりがいいですね、牛を指しているというのは。

ところが学問として、牛ということばは牛をさしているのではなくて、馬とのちがい、ねずみとのちがい、人間とのちがい、机とのちがいを表しているという考え方が出てきた。

それを差異というわけです。差異ということが、哲学的に大きく問題になってきたのです。ちがいを問題にする、ちがいに成り立っていると。

その差異において成り立っているということから来たものだから、最近それに対する反動として、同一性ということがまた強調されてきた。ことばの問題じゃないですよ。

人間はみんなちがう。私はあなたじゃない、彼でもない、というふうにちがう。というふうに、ちがいを問題にする考え方から、自己同一性ということが、アイデンティティーということがひじょうに強調されるようになった。私はほかならぬ私であると。私は私だ

と。私がほかならぬ私であるということはどういふことか。こういうことが今度は強調されるようになって来たんですね、差異の問題じゃなくて。

つまり、ものの見方、考え方というのは、絶えず、こつちへ傾くと、反動として、今度はあつちへ傾くという歴史があるのです。

それで、現代の哲学は同一性と差異性ということがキーワードとしてひじょうに大きくクローズアップされてきたということなんです。

そのきっかけは最初にソシュールが、ことばというものの本質は 差異である、ことばはものそのものを指しているのではない、ことばの網の目があつて、その網の目の関係、他のことばとのさまざまな関係の中で、そのことばがある、というふうに言ったことなんです。それは、一つはどのところから来たかということ、名は体を表すという考え方があつたでしょう。牛という名は牛というものを表すという考え方をしてきた。そうすると、神ということばがあると、神というものがあると思つてしまふのです、逆に。

ことばは何かを指示していると言うでしょう。牛ということばは牛そのものを指しているのだと。そういう考え方が根強くあると、今度はそれがどういふことになるかということ、たとえば「幽霊」ということばがありますね。そうすると、「幽霊」というものがあるのだと逆に考えてしまふ。ことばが何かを指しているのだというから、幽霊ということばがあると、幽霊というものがあるというふうになつたんですね。神ということばがあると、神というものがあるのだと。そういう逆立ちした関係が出て来たということがあるのです。

話が横道に來ましたが、何を言いたいかというと、要するに、現代の哲学も科学も同一性と差異性ということを大きく考えるようになって来たということなんです。

しかし仏教哲学では早くから平等相、差別相というかたちで、そういうものの見方、考え方をしてきたと。その一つの例として、宮沢賢治の「鳥百態」という詩に文字通り表れているということです。

『いぬが いっぱい』の思想

そして、仏教とは関係のないこのメキシコの作家が『いぬが いっぱい』に書いていることは、まさに仏教哲学が言っている平等相と差別相そのものです。

でも、書いている作者は仏教のことを知らずに、現代の哲学がこういう考え方をしているのです、そういう考え方にもとづいて書いているのだと思います。いわば、そういう作品です。

ですから極端なことを言うと、この『いぬが いっぱい』という作品は、現代哲学の最先端に行くものの見方、考え方にもとづいて書かれていると言つてもいいし、古くからある仏教哲学の差別相と平等相という考え方にもとづいて書かれていると言つてもいいし、

はしなくも両者が一致したわけですよ。

おもしろいと思いませんか。

では、ねこというのは一体何だ、という時には、やはり同じように考えればいいわけですよ。ねこにもシャムねことかチンチラとかいろいろいますよね。みんな違う。大きさも違う、性質も違う、姿も違う。しかしみんなニャーンと鳴く。というふうなことになるでしょうね。

換喩

ついでにもう一つ、ことばの問題として、「ワンワン鳴く」というときに、この「ワンワン」ということばは、犬ということ特定しますね。犬ということばの代わりをするわけですね。代わりをするから、これを「換喩」というのです。「たとえ」です。「ワンワン」というのは、「犬」ということばの代わりをつとめるたとえだから「換喩」といいます。換喩はたとえの一種です。

たとえば、「赤帽」というのを知らないですか。今はもういませんが、鉄道の駅なんかで荷物を運ぶ人のことを赤帽と言いました。なぜ赤帽と言うのでしょうか。赤い帽子をかぶっているから。赤い帽子をかぶっていて、赤い帽子をかぶる人は他にいなかったから、赤い帽子で荷物の運び人を特定できるわけです。

「角帽」というと大学生。これも換喩です。今はかぶらないけど、戦前は大学生は角帽をかぶったわけですよ。だから「大学生が来た」と言う代わりに「角帽が来た」と言えるわかる。

おまわりさんのことを「駐在」と言うでしょう。駐在というのは、駐在所という建物ですよ。駐在所にいる人は、おまわりさんしかいませんよ。だから駐在さんと言えばおまわりさんのことになるのですよ。

春日の局の「局」というのは建物です。春日の局という名前の建物があつて、その女主人である人を春日の局と呼んだ。

建礼門院徳子。建礼門という建物の名前で清盛の娘徳子を表す。じかにその人の名前を指すと失礼だから、その人が住んでいる建物を指して、建礼門院と言えば徳子のことだというふうな。これを換喩と言います。つまり、その人を特定できるものをもって来てたとえたわけです。

「ワンワン」とか「モーモー」とかいうのも換喩です。幼い子どもが「ワンワンが来た」と言えば、犬が来たということと言っているわけです。犬ということばの代わりになる「ワンワン」ということばでたとえたわけです。これを換喩と言います。たとえの一種です。

たとえば「八の字ひげ」とか言うでしょう。八の字ひげの男は他にはいないというときに。

だから、言語表現の方から言えば、「ワンワン」……というのは換喩ということになる。哲
学の方から言えば、いま言ったような同一性、平等相を表すということになるわけです。
ということとで終わりにします。